

夏祭り

時三吉

月は不変の姿を雲間に浮かせ

汐は脚下の潮に高まる 濡れた光りを 罅に

わらし達は 生きた！

だがわれは ほんまに 生きてゐるかな？

ドンキヤカキヤカキヤカ (何と消えゆく記憶の速さ)

今宵 外は 暑く 焼けた跡と 或は 河畔の夏祭り

木片で建てた祠をのぞいて 外は 知れぬ ような 人は ぼろぼろ

踏みゆく瓦礫が 原子熱線の 爛れを 残して ぬよよ

賽銭が ころころと 舞ふ 十円や百円札であふれ

めん当り前の事々々も 思ひ込めて ぬよよ

ドンキヤカキヤカキヤカ (小と身は ぼろぼろ 焼傷の 白煙の あり 臭い)

女は不思議な子ゆり 男は 気取った 浴衣かけ

何処かへ 出て 来たか 人々は ありかも 本当は 何か 振

ことでも ある ように 昼間は 見られぬ 生々とした 表情で

香具師と 酔っぱらんと スリと 喧嘩と 臭い

昼間は見くらぬ 生々とした表情で

香具師と酔っぱらふとスリと喧嘩と点綴し

肩もふれ合ふばかりに かんかん 経て来たん

急ごしらうの 電飾のもてで 神楽は紛装重々しく

又しても舞の鏡け子 天の岩戸の物語り

(ドニヤヤカ ヤカ ヤカ)

意志への指向を 遂に持たない 諦めの世智。(